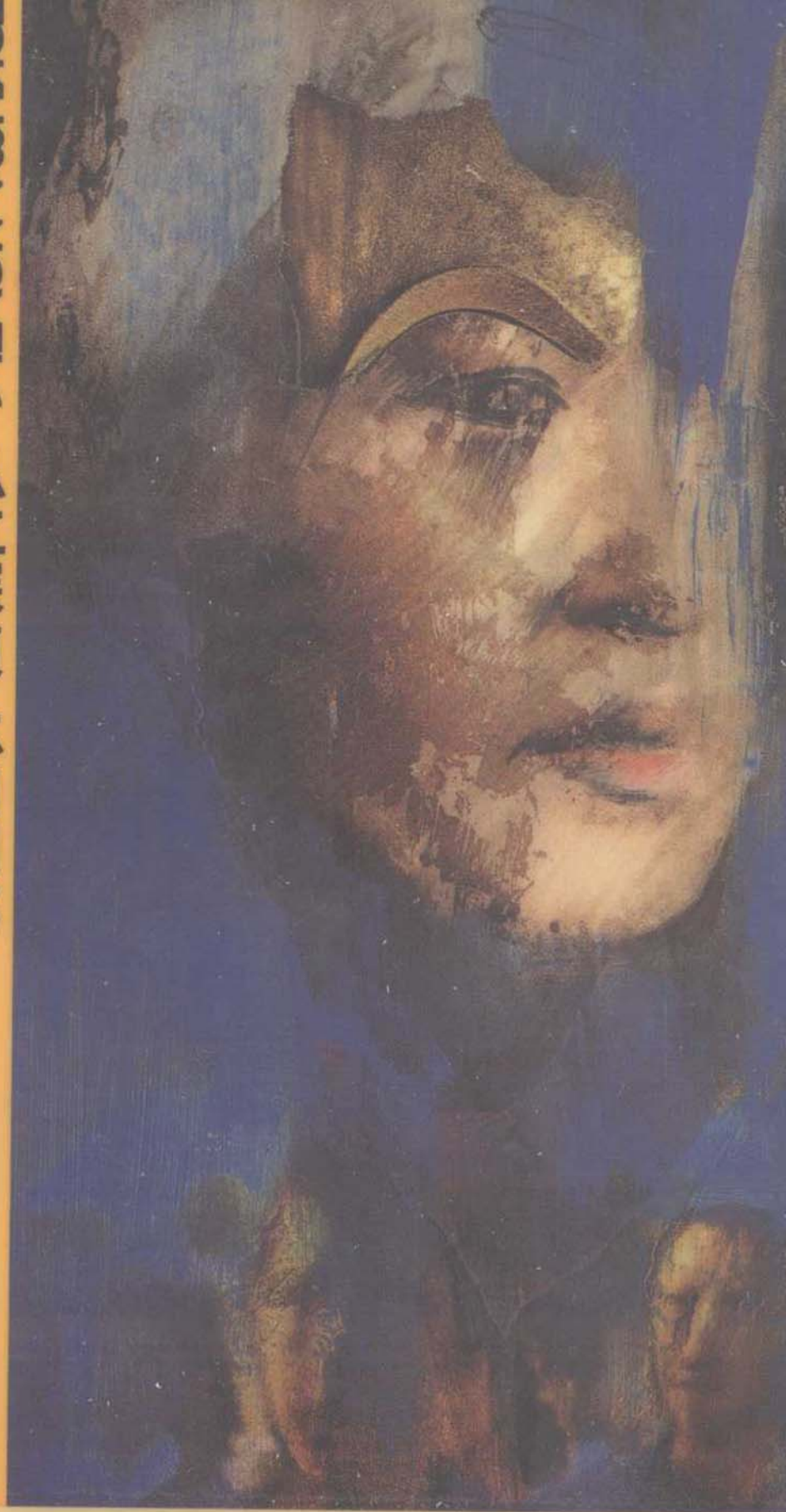


生島治郎



TOKUMA NOVELS

私立探偵・志田司郎

執事人者は夜明けに

私立探偵・志田司郎

裏金ルートを追って、東京-香港-バンコクへ。堂々の完結篇!

きよ かい

巨魁を追いつめ

ハードボイルドの颯

徳間書店 定価=700円(本体=680円)



TOKUMA NOVELS

生島治郎

殺人者は夜明けに来る 下

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

© Jirô Ikushima 1989

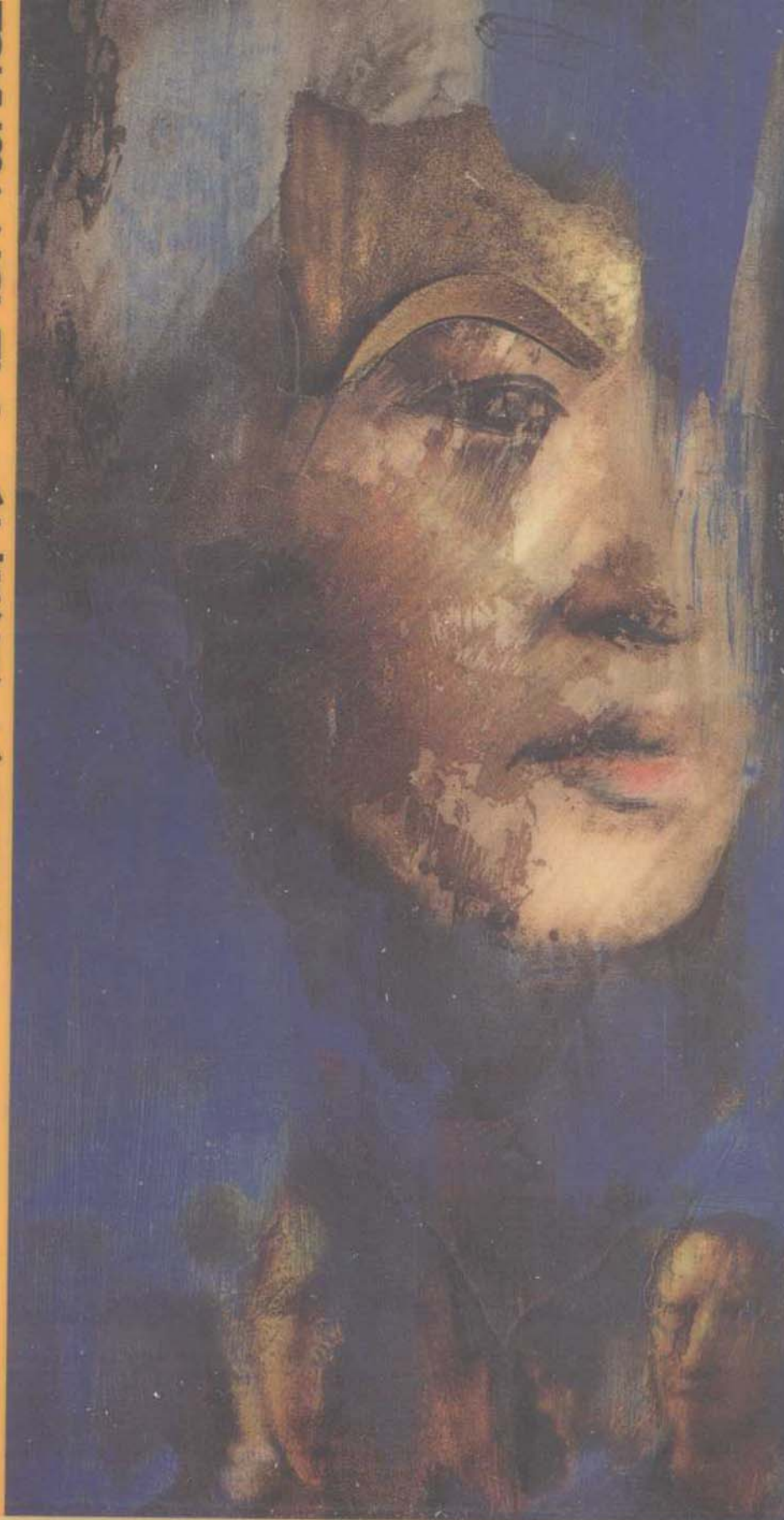
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 高田暁郎〉

ISBN4-19-153971-X

生島治郎



TOKUMA NOVELS

私立探偵・志田司郎

殺人者は夜明けに

私立探偵・志田司郎

裏金ルートを追って、東京-香港-バンコクへ。堂々の完結篇!

きよ かい

巨魁を追いつめ
ハードボイルドの颯

徳間書店 定価=700円(本体=680円)

C0293 P700E(0) 定価=700円
(本体=680円)



殺人者^{さつじんしゃ}は夜明^{よあ}けに来^くる下^く・生島治郎^{いくしまじろう}

年務めてきた雑誌の新人賞選考委員を、持ち回りにしてはどうかと思っている。同じ選メンバーが続いたこともあるが、最近の候作の質低下を嘆く思いも少なくない。有力家を育ててきた賞だけに、新人に対する注も厳しくなりがちだが、プロを震撼^{しんかん}せしめような作品を期待している氏である。

TOKUMA NOVELS

生島治郎の

ハードボイルド

★作品★

死んで
たまるか

死にぞこ
ないの街

腹中の敵

ヤクザ

刑事^{テカ}

新書判

文庫判

文庫判

文庫判

私立探偵・志田司郎

殺人者は夜明けに来る
下
生島治郎



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

追跡	9
謀殺	91
釈放	164
死の微笑	194

上巻のあらすじ

メナム河に日本人男性の死体が浮かんだ。男はバンコク在住の貿易商・**櫛田**^{くしだ}昇^{のぼる}。その強引で派手な商売のやり口は、現地の人々の反感を買っていたという。一方、東京ではその五日後に、正央銀行為替管理課長補佐・**盛部博**^{もりべひろし}が絞殺体となつてマンションで発見されるという事件が起きた。

私立探偵・**志田司郎**^{しだしろう}が、この二つの殺人に関連性があることを知つたのは、事件発生のはぼ一カ月前、正央銀行頭取・**佐竹佑正**^{さたけすけまさ}に、ある事件の調査を依頼されたからだつた。佐竹の個人秘書・**河原いずみ**^{かわはら}の訪問を受けた志田は、その美貌に心の昂揚^{こうよう}を覚える。彼女に案内されて会つた佐竹が、報酬二千万円を提示してきりだした話とは次のようなものであつた。

正央銀行の現金輸送車がある者に襲われて、車内にあつた十三億円の現金のうち、三億円が持ち去られるという事件が起こつた。その際、車に同乗していた盛部博が姿を消してしまつた。しかも、この三億円拐帯事件は警察沙汰にはできない性質のものであつた。つまりその金は、国際金融の投機のからくりを利用して、佐竹が私^{わたくし}しようとしていたものであつたのだ。

からくり話を持ちかけてきたのは櫛田昇だった。櫛田の会社には一千万ドルの現金があつた。これを正中央銀行を通じて円に換える（一ドル＝百三十円）と十三億円になる。このレートが一ドル＝百円になれば三億円の差益がふところに転がりこむことになる。ただし為替管理法によつて、なんの理由もなしに一千万ドルもの現金を円に交換することは禁じられている。従つて、外為銀行を通じて、東京為替市場で円に交換する保証をもらい、日本銀行から現金をひきだすより方法はない。正中央銀行はそのパイプ役となつたわけだ。

しかし、みすみす銀行に三億円の差益を儲けさせるのを業腹ごうはらに思つた佐竹は、もうひとつのからくりで差益を自分のものにしようと図つた。すなわち、一千万ドルを銀行の手持ちドルとせず、銀行と取りひきのある商社会社の輸出入金ドルというふうに見せかけ、銀行はその商社会社のドルを換金してやるという方法をとるのである。こうして住村商事の岩城敏幸いわきとしゆきが仲間ひきいれた。

為替相場の盲点をついたこの一大マネーゲームは、成功目前だったが、現金輸送車が襲撃され、何者かに差益を横取りされてしまったというわけだった。

佐竹の依頼を受け、調査を開始した志田司郎は、櫛田の背後に暗躍する外国人の存在をかぎつける……。

本文插画・虎尾
隆

追跡

1

盛部の住んでいる団地に着いたのは、まだ午後五時前だったが、あたりはうすぐらくなりかけていた。

団地のなかは、夕食の支度をするために買物籠かごを下げた主婦たちが往き来し、どこからか魚を焼く匂いや、シチュウを煮る匂いがただよってくる。何人かの子供たちが自宅へ帰らなければならない時間を惜しむように、金切り声をあげて走りまわり、遊んでいた。

私はおよそ自分にとって縁のなさそうな、そういうたたずまいのなかを突っ切って、盛部の部屋のあ

る棟へと急いだ。

私だって、自分の家庭を持ち、子供たちにとり囲まれたなごやかで平和な生活をしたいと願わないわけではない。

しかし、かつてそういう家庭を持つとうとし、仕事のために、それを破壊してしまった私にとって、ふたたびそんなチャンスはめぐってくるはずもないし、その資格もなさそうだった。

現に、いま、急ぎ足で歩いていく私は後頭部に傷をつけ、そのうえ、いっどこで、生命をねらわれる破目におちいるかわからない危険を背負っている。家庭を持っていたら、私はとうてい、その危険に耐えられないであろう。

もし、本当に愛すべき家庭を持っている男ならば、私のような仕事はできないはずである。家庭を守るために、どんな忍従もし、男として譲歩してはならない場合にも、譲歩してしまふ。

そんな男たちを軽蔑けいべつはできなかった。

自分にとって、大切なものを守るために、男としてのすべてを賭けることも、ひとつの立派な生き方にちがいない。

ただ、家庭を愛するがゆえに、卑屈になり、他人をも裏切り、自己保身に汲々とする男たちがあまりにも多すぎる。

（家庭の幸福は諸悪のもと……）

という太宰治の言葉をふと私は思いだした。私のような男にとっては、はなはだ都合のいい言葉だが、太宰がこの言葉のなかに家庭への憎悪と、またその逆に、はげしいあこがれを含ませているのも感じないわけにはいかなかった。

たとえば、盛部は典型的なマイホーム主義者であつたろう。直子を愛し、子供たちを愛し、よき家庭の主人である彼は、その家庭の幸福を破壊したくないために、銀行での自分の地位を守ろうとし、佐竹頭取の云うがままになっていた。

そして、一方においては、妻の直子の云うがまま

にもなっていたようだ。その結果、今度の事件に巻き込まれた。いや、巻き込まれたのか、彼が進んで一役買ったのかはわからない。

いずれにしても、彼は自分の家庭をより豊かにしようとして、佐竹と共謀し、濡れ手で粟のマージンをかせごうとした。そのあとで、さらに、自分の分け前をふやすために、他の誰かと組んで、現金輸送車襲撃の手びきをした疑いもある。

それをそそのかしたのが、妻の直子か、他の誰かはまだ見当がつかない。

盛部が手びきをしたものの、ただうまく利用されて、襲撃者たちにどこかへ監禁されているのか、それとも、ほとぼりが冷めるまで自ら身をかくしているのかも不明だった。

しかし、直子が子供たちと一緒に姿を消したというニュースが真実ならば、盛部はまだ生きていて、身をかくしているところへ妻子を呼びよせたという可能性が大いにありそうだった。それを確かめなけ

ればならない。

私は、盛部の部屋の向いにある扉のブザーを押した。

* * *

例の詮索好き^{せんさく}な主婦が扉を細めに開けて、私の顔をたしかめると、ホッとした表情で、扉を大きく開けた。

「あなたに頼まれていたから、あたしはあれからずっと、お向いの様子を気を配っていましたのよ。ほんとに、自分の用事もそっちのけにして、そのことばかりに気をつかっていたぐらいですわ。それなのに、あなたときたら、せっかくニュースを手に入れてすぐ連絡しても、ちっとも、つかまらないんですもの、あたし、すっかりイライラして……」

主婦の愚痴^{ぐち}はとめどがなさそうだった。それに、直子の動向を知り、なにかあやしいとカンづいたことで、かなり興奮もしているらしい。

「まったく、ご迷惑をかけて申し訳ありません」

私は要点だけを彼女からひきだそうとした。彼女のとめどないおしゃべりを大人しく聞いていれば、一晩中、かかるにちがいない。

「ところで、直子さんが、お子さんたちとお出かけになったのは、正確に昨夕の何時頃でしたか？」

「そう、もう八時を過ぎていましたね。向いの扉が開いて、子供たちの声と、それをなだめる直子さんの声が聞えたので、あたしはすぐに覗^{のぞ}き窓からお向いの様子を見てみたんです」

意味ありげに、主婦は声をひそめた。

「すると、直子さんが外出用の姿で、子供たちにもちゃんとした服装をさせ、階下へ降りていくところでした。あたしはこれはあやしいとピンときたものだから、扉を開け、さりげなく声をかけたんです」

「直子さんが子供たちとそんな時間に外出することはめったになかったんですね？」

私はむしろ、わざわざ人目にたつ形で、直子が子

供たちを連れて出かけたことに不審を抱いた。

もし、彼女がひそかに、盛部のところへ行くとするれば、昼間、ごくふつうの服装で、近所に買物へでも行くようなふりをし、子供たちを連れてでかけるはずである。

その方がこの主婦にも気づかれず、人目にもたたなかったろう。利口な直子にそれぐらいの計算がでないわけではない。

「ええ、ご主人とそれぐらいの時間にお出かけになることは、以前には、ときどきありましたけれど、お子様連れというのはめつたにありませんでしたね」

と、主婦は答えた。

「だいたい、下のお子さんはそれぐらいの時間にはもう眠る頃ですもの。だから、なおさら、あたしは変だなと思ったんです」

「で、あなたは扉を開けて、直子さんに声をかけてみた。直感の鋭い方だから、あなたにはそのときの

直子さんの様子でなにか妙な点にお気づきになったでしょうな」

私は主婦をおだてあげた。

「彼女の反応はどうでした？」

「ええ、ちよつとギクツとしたように感じられましたけれど、ああいうふうに落ちついた方ですから、すぐに、何気ないふうな態度で返事をしましたわ。でも、内心ではかなり、あわてていたんじゃないかしら。あたしのカンではそう感じましたね」

私のおだてにのつて、主婦はますます得意気にしやべった。

「『あら、いま頃から、どこへお出かけ？』って、あたし、訊いたんです。そうしたら、直子さんは、一瞬、黙りこんでから、『実をいうと、主人がずっとこのところ、銀行の仕事で都内のホテルに入りつきりになっていたんですけれど、やっと一段落したので、久しぶりにあたしたちと逢いたいというので、出かけるところですの』と答えました。そして、

『まだ、主人はすっかり用がすまないらしいので、二、三時間したら、あたしたちは、またここへもどってまいります。その間、留守宅の方をどうぞよろしく』とあたしに頼んだんです。ところが、いまだに帰ってこないでしょう。もし、ご主人の泊っていらっしゃるにずっといらっしゃるのなら、あたしに留守宅を頼んだ以上、電話ぐらいかけてきそうなものじゃありませんか』

「ごもつともですな」

私は心から同意したように、深くうなずいてみせた。

「しかし、直子さんは自分の意志で出かけられたようにみえたんでしょうね？　誰かにむりに連れだされたふうにはみえなかったですか？」

「いえ、誰かにむりに連れだされたという気配はありませんでしたわ。ただ、そう……」

と云って、主婦は小首をかしげた。

「直子さんたちの横に、まだ若い男の方が立ってい

ました。きちんとした地味な服装をした大人しそうな人で、とても、脅迫などしそうになかったし、別に、直子さんをおどすようなものも持っていない、ごく控えめな態度でした。直子さんは、その人を銀行からお迎えに来て下さった人だと、あたしに紹介してくれました。いかにも、銀行員といった感じの男性でしてね、あたしに黙って、頭を下げただけでした」

「ふむ、すると、直子さんは自主的に子供を連れ、その迎えの男に案内されて、都内のホテルへ向ったというわけか。しかし、実際には、盛部氏はあなたにだけ、この間お話ししたように、行方不明になつて、銀行側にも所在がわからなかったはずなんですよ。それなのに、銀行から迎えの男がくるというのは妙だな」

「そこなんですよ」

主婦は好奇心をむきだしにして、相槌を打った。

「あたしも、そのことを考えたので、おかしいと思

いましてね。よっぽど、警察に連絡しようとも考えただけで、あなたとの約束があったから、とりあえず、あなたに連絡することにしたんです」

「いや、それは助かった。うっかり、警察などに連絡されると、ことが大げさになる。盛部氏の銀行での立場が非常にまづくなりますしね。お向いの家庭がめっちゃめっちゃになる原因を、あなたがつくったことになったら、寝覚めがわるいでしょう。まず、わたしに連絡して下さったのは賢明でしたよ。あるいは、銀行側で、盛部氏の所在がわかったので、至急迎えをよこしたのかもしれませんが。とにかく、警察に連絡するかどうかの判断はわたしに任せておいて下さい。あなたは妙なトラブルにまきこまれない方がいい」

この主婦の耳に入っただけには、いずれ、団地中にこの噂がひろまるであろうことは予想にかたくなかった。それを防止する意味で、私は財布から五千円札を一枚ぬきだし、彼女の手にとにぎらせた。

「このことは誰にもしやべらないで下さいよ。うつかりすると、盛部氏や家族の生命にかかわるかもしれない。そうなった原因があなたの口からでたことだとわかると、あなたもこの団地にいたたまれなくなるおそれもある。いいですか、すべての処置はわたしに任せて、なにか情報を耳にしたら、わたしにまた連絡していただきたい。これはほんのお礼のしるしです。今後ともよろしくご協力願います」

「別にあたしは、こんなものをいただくつもりじゃなくて、ただお向いの家庭が心配だったから……」

もじもじしながら、掌のなかの五千円札をこっそりあらため、結局、それを彼女は受けとった。好奇心を満足させられる上に、五千円の報酬はわるくはなからう。ただ、自分の知り得たことを、団地内の主婦たちにしゃべれないのが残念にちがいない。

「わかりました。なにかわかったら、すぐにあなたにお知らせしましょう。それに、このことは、誰にもしやべりません」

